

私が見た日本

著者：Piotr Władysław RYBKA

〈名古屋大学大学院理学研究科素粒子宇宙物理学専攻Ω研 〒464-8602 名古屋市千種区不老町〉
e-mail: rybka.piotr.wladyslaw@b.mbox.nagoya-u.ac.jp



和訳：鈴木 建

(天文月報編集委員会)

私の名前はピョートル、リプカです。東ヨーロッパのポーランドから来ました。2010年10月より、名古屋大学の博士課程に所属しています。Ω研究室に在籍し、竹内 努准教授の指導の下、銀河の形成と進化について研究しています。特に、赤外線で見える銀河の統計的性質について、興味をもっています。

何故、日本に来たのか？

日本に行くという話が持ち上がってきたのは、アグニエシュカ・ポッコ博士の指導の下、クラクフのヤギェロニアン大学の天文コースで修士論文を執筆していたときのことでした。ポッコさんは名古屋大学のΩ研と活発に共同研究をされており、私にも外国で研究を継続することを薦めてくださいました。さらに、私はこれまでの人生で、何度か日本文化に触れ合う機会があったことも、私が日本に来ることを決めることにプラスに働いたと思います。最初の日本文化との出会いは、私の高校生の頃のドラゴンボールの大流行でした。私もドラゴンボールにはまってしまい、ポーランドで最初のマンガやアニメの雑誌である“KAWAII”を定期購読するようになり、日本に徐々に興味をもつようになりました。また、友達の少女が紹介してくれた折り紙に、私はたいへん興味をもち、紙の芸術の世界にのめりこみました。そのときから、友人の誕生日には折り紙を作ってプレゼントにするようになりました。さらにその次に出会った日本文化は、俳句でした。それは、ポーランド

人のノーベル文学賞受賞者であるチェスワフ・ミウオシュによる、俳句のポーランド語訳を読んだことから始まりました。それ以来、ときどき携帯電話で俳句のメッセージを友達に送信したりしています。

日本でどうやって暮らしているか？

最初は、複雑な漢字の説明や案内を見ながら、電子レンジや洗濯機、エアコンを使ったり、大学の生協食堂で欲しいものを注文するのが一苦勞でした。また、食事をするとき箸を使うことも、あまり実践的でないことのように思えました。食べ物はずっと箸からこぼれ落ち、口まで運ぶのもたいへんでした。しかし今では、毎日の鍛錬のこともあり、箸を上手に使いこなせるようになりました。もう食事を前にして、空腹をすぐに満たさないなんてこともなくなるでしょう！

名古屋の街の広さは、私の故郷クラクフと同じぐらいですが、人口は3倍以上です。多分そのせいでしょうが、最初の何か月間かは、自分の部屋、通りや建物などの自分の周囲の空間が、突然狭くなってしまったような錯覚に襲われ、何だか

人形の家に住んでいるような気分になっていました。しかし時間が経つにつれそのような感覚も薄れ、私は実際に日本に住んでいるんだと実感できるようになりました。

日本は世界の中で最も経済的に発展した国の一つだと言われますが、私はそのことを肌身に感じています。12時間のフライトで疲れ切って成田空港に到着しましたが、その後何の問題もなく電車の切符を購入し、正しいホームから電車に乗りました。そして電車を乗り換え、新幹線に時間どおりに乗りました。駅では行先表示がわかりやすく、すべてが予定どおりに進んだのですが、逆にこのことに私は少なからず衝撃を受けました。というのも、故郷のクラクフの駅はまるで迷路のようで、私自身何度も迷子になっていたからです。が、現在クラクフの駅は再開発中だと聞いています。クリスマスに故郷に帰るときには、もう迷子の旅人のようにはならないことを期待しています。

また別の一面として、日本はお役所仕事幅を利かせる国であるとも思います。実際、日本に到着した直後と、半年後に引越しをする際には、膨大な量の書類に記入しなくてははいけませんでした。外国人留学生のチューターでもあるBishさん（石橋和紀GCOE特任准教授；訳者注）が献身的にお手伝いをしてくださったのですが、それでもまだまだ自分で処理すべき事務作業が膨大にあり非常にたいへんでした。でもこれは逆にいうと、親切な事務員がいるよく組織された事務組織が発達しているということでもあり、いろいろなことがスムーズに運ぶので助かっています。

来日前は、日本では自転車が主要な交通手段の一つになっていることを知りませんでした。実は、私は自転車に乗るのが大好きです。クラクフでの学生時代には、天文台までの20 kmをときどき自転車で通っていました。また金曜の夕方には、よくサイクリングに出かけていました。1週間かけて、クラクフからグダニスクまでの700 kmの道程を自転車で旅行したこともありま

す。しかしポーランドでは雨が多く、冬はとても寒く雪も多いので、1年を通して自転車に乗ることができません。しかも、自転車の盗難もよくあり、たとえ安い自転車でも油断することができません。私の友達が教会にいる間に、彼の自転車が盗まれたこともあります。日本は自転車乗りにとっては、楽園だと個人的には思います。泥棒がほとんどおらず、天候も安定しており予測しやすいからです。

自転車のほかには、山登りも好きです。でもこれまで日本では、鈴鹿山系の雲母峰（きららみね）—まあこれは標高が900 mぐらいなので「山」というより「丘」かもしれませんが—に行っただけですが。この雲母峰には、最初に登った時には道に迷ってしまったということもあり、結局同じ日本人の友人と再度挑戦しました。2回目に登った際には「きらら」と名がつく丘が二つあることがわかったという発見もありました。この登山の最中、われわれの足にまとわりついてきたヒルをこれから忘れることはないでしょう。ポーランドにはヒルがおらずハイキングのときにも注意する必要はないので、そのときは完全に無防備でした。

ポーランドは地震が起きない安定な地塊の上にあるため、東北関東大震災は私にとってこのような自然災害の初めての経験でした。地震の瞬間、私は4階にある研究室でたまたま一人で研究していました。最初は何が起きたかわからず、めまいや軽い興奮状態にあるような感じになりました。その後の数日間ニュースを見たり新聞記事を読んだりし、その瞬間に多くの人が住む場所やすべてを失ったのだということを知りました。私は一人の外国人として、日本人のために何かをすべきだと感じ、津波で被災したある家族を支援するための、小さなチャリティーコンサートの企画に参加しました。

日本の食事を楽しんでいるか？

私の一番好きな日本の料理は、魚料理です。

ポーランドに比べてどの魚料理も新鮮です。サバの塩焼き—大学の生協食堂でも食べることができ—るありふれた料理だと思いますが—を見ると、よだれがでてきます。醤油、豆腐、納豆、味噌やそばという食材は、他の地域にはあまりない料理ということもあり、最初は妙な味だと思いました。しかし時間が経つにつれ、それらの食材のおいしさがわかるようになり、今では私の日常の食材になりました—ただ納豆を除いてですが…。ポーランドではパンが主食で、毎朝、毎晩、ハムやソーセージ、チーズや野菜などと一緒に食べています。日本のスーパーで手に入る多くのパンは、残念なことに私にとっては食べるものではなく、噛み砕くもののように感じられます。しかしやはり「すべては手に入らない」ということを、肝に銘じなくてはいけないと思っています。私の目の前にある、私にとって新しい味であるさまざまな日本の料理に感謝しています。

日本人についての私の意見？

日本人は非常に几帳面で、公共の財産を大切にす—ると思います。日本では、ポーランドと違って通りに犬の糞も落ちていませんし、あまりゴミ箱が設置されていないにもかかわらず、道には目障りなゴミや吸殻が散乱していることもありません。私のアパートから大学への通学に使う比較的細い道には、たくさんのカーブミラーが設置されており、さらにそれらの鏡を保護しておく必要がないことに驚きました。ポーランドの私の家の近所では、こういった鏡は金属製のネットで保護しておかないと、荒くれの若者たちに破壊されてしまいます。また、私が夜遅く帰宅するときにも、子供たちが親の付き添いなしに走っているのを見かけることがときどきありますが、これにも驚きました。というのも、私の故郷では夜10時より帰りが遅くなる際には、死の恐怖を感じる—ことさえあります。こういった日々の経験から、日本は非常に安全であり、日本人たちが高い規範

意識をもっていることがわかります。

名古屋に住み始めてから、多くの親切—時にはおせっかい過ぎる—こともありましたが—な日本人々々から助けてもらいました。これまで、お寺や神社に行こうとしてよく道に迷いました。そんな時は、ポーランドの格言「舌の先にはガイドがいる。(The end of your tongue is your guide.)」に従って、近所の人々に道を尋ねると、いつも懇切丁寧に教えてもらうことができました。一度などは、道を尋ねた親切な女性が家に招いてくれて、私の探しているお寺の場所を詳しく教えてくれました。しかも、ちゃんと私がお寺に到着できるか心配してか、最終的にそのお寺まで連れてい—ってくれました。別れるときに、彼女が電子辞書を指差したので見てみると、ある日本語の単語としての英訳の一つに「blockhead(うすのろ)」(訳者注：この部分は、その女性が「ごゆっくり」などと言いたかったものと想像しますが、真意はもう会う事も無いであろう「その女性」に聞かないことには分かりません。)とあったのでい—ささか驚きました。そこで彼女にその真意を尋ねましたが、彼女が「blockhead」の意味を知ると、彼女は「そんなつもりはなかったんです」と強く首を横に振りました。このことは、私にとって異文化交流の貴重な経験になりました。日本語の勉強をこれからも続け、この難しい言語をマスター—していきたいです。

さいごに

来日以来、まだ私は徐々に日本での生活に慣れつつある段階です。すごく暑い名古屋の夏を耐えることは、私にとっての挑戦でもありました。そんな困難もありますが、私に日本での博士課程進学を薦めていただいた指導教官であったポッコ博士には感謝しています。昨年1年間は、さまざまな経験をしました。ここ名古屋のアカデミックな環境に触れて培われてきた、独立心と国際的共同研究の大切さを心にとどめ、これからの私の研究を成功させたいと考えています。

(訳者注. 英語原文からの直訳ではなく、意識されている部分があります.)

Japan, I'm Experiencing

Piotr Władysław RYBKA

Ω Lab., Department of Physics, Graduate School of Science, Nagoya University, Furo-cho, Chigusa-ku, Nagoya 464-8602, Japan

Abstract: My name is Piotr Rybka. I come from Poland, country in eastern Europe. I began doctoral studies at Nagoya University at the beginning of October 2010. I am a member of the Ω Laboratory which researches formation and evolution of galaxies and is directed by Professor T. Takeuchi. My research is concentrated on statistical properties of galaxies visible in infrared.